

東讃砂糖しめ唄

砂糖は讃岐三白(砂糖・塩・綿もしくは米)の一つに数えられ、広く知られていました。

水に恵まれない讃岐では、稲作のために溜池築造に力を注ぎましたが、新田開発に伴う用水確保は難しく、江戸時代高松藩では、用水節約、産業育成の手段として砂糖きびの試作をはじめることとなりました。その砂糖きび

の栽培には、平賀源内も関わったと言われていいます。七代藩主 松平頼起よりおきの時に至り、砂糖の製造に初めて成功し、讃岐砂糖の名声を全国に広めることとなりました。江戸時代の天保の頃には、大坂への積み出し額は六百十五万斤に達し、全国産額の大半を占め、年ごとに産額を増していましたが、明治二十五年頃から輸入の砂糖に押され衰えていきました。

砂糖きびの別名は甘蔗かんしょとも言い、砂糖は甘蔗の茎が長く成長してから初冬に刈り取り、その茎を圧搾して糖汁を絞り出し、それを精製して砂糖を作り出します。絞り出す圧搾機には三個の花崗岩を「ろくろ」として組み合わせて造った「砂糖車」が用いられました。三個の石が相接した歯輪によって「ろくろ」は回転し、その隙間に甘蔗を入れて押し潰し、糖汁を絞り出す仕組みになっています。その「ろくろ」に引木を取り付け、動かす動力には、牛を使うことが多かったそうです。牛を操る者(牛方)、甘蔗を押し込む者、流れ出る糖汁を受け樽に入れる者三人で、主に夜間に作業を行い、砂糖しめ唄は牛方が、眠気覚ましに唄ったようです。



讃岐国白糖製造図 大日本物産図会 / 香川県立ミュージアム所蔵



砂糖締め風景 (草薙写真・大内町三本松) 昭和30年代 / 瀬戸内海歴史民俗資料館蔵



道具(砂糖車・砂糖締め小屋) / 四国村

- 東讃砂糖しめ唄 歌詞
- 1、イヤー 眠た目をしてヨー
ハアー 朝とに起きて
締め子するにもヨー
ハアー かわいさヨー(アーモーターリ)
 - 2、イヤー 牛もえらからヨー
ハアー 締め子もえらい
四番返しのヨー
ハアー かす締めじゃヨー(アーモーターリ)
 - 3、イヤー 締め子さん達ヨー
ハアー 毎度の夜食
私やいつものヨー
ハアー はみがやしヨー(アーモーターリ)
 - 4、イヤー 牛よ見よまえヨー
ハアー 早よもうて寝んか
済めば餌につくヨー
ハアー 床につくヨー(アーモーターリ)

仁尾網引き唄 (三豊市仁尾町)

八十八夜が近づき、若葉が日ごとに色濃くなると、瀬戸内海では初夏の豊漁期を迎え、いわゆる「うおじま」の季節、1年中で最も鯛の多く取れる時期となります。

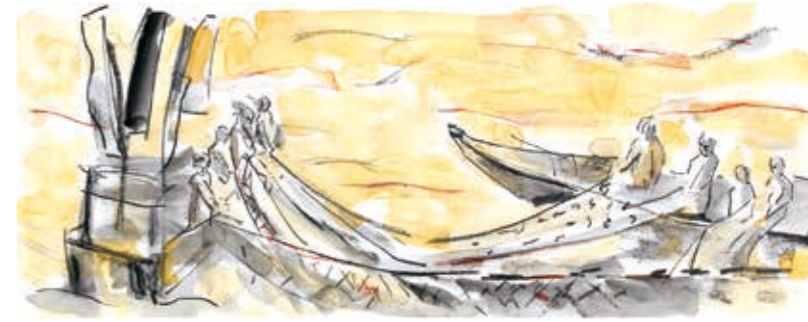
外海で冬をすごした鯛の群れは春の潮が暖かくなるにつれ、波静かな瀬戸内海に移り産卵する習性を持っています。鯛の群れは鳴門海峡から丸亀付近の海上まで移動し、ちょうどこの進路にあたる海域が鯛網の漁場となっていました。

東讃地方では庵治、直島が昔から鯛網の豊かな漁場としてよく知られています。

鯛を捕えるにはもっぱら「しぼり網」によるものでしたが、仁尾網引き唄は、この作業の時や仁尾の港に入る漁船の大漁祝い、また総出で行う網引きの際に唄われたと言われていいます。

この漁法は九隻の和船を一組にして、鯛の群れを遠巻きにし、潮の流れを考えて網を入れて行われます。もちろん網は「しぼり網」です。

産卵期に入った鯛の鱗の紅色は、きわめて美しく、この頃の鯛を特に桜鯛と呼びます。大漁の時、網いっぱい桜鯛がはね、海面はみるみるうちに紅色に染まります。帰途につく船では喜びにわく漁師達が、「大漁節」を威勢よく歌ったようです。讃岐各地(庵治町・仁尾町・観音寺市伊吹町等)の大漁節は、どれも節回しは短く、威勢よく、歌われた唄です。



「鯛網乃図」『讃岐国名勝図会』/ 国立公文書館デジタルアーカイブ



香川・庵治町鯛網 / 高橋克夫氏提供



道具(タイ吾智網) / 瀬戸内海歴史民俗資料館蔵

- 仁尾網引き唄 歌詞
- 1、(アーキリバ イエーホイエーホ
ヨイトマカセデ ドッコイ ドッコイ)
わしが サーヨーオエー 出します藪から笹を
(アーヨイト ヨーイト)
つけておくれよ コリヤ短冊を ヨーイトナ
 - 2、(アーキリバ イエーホイエーホ
ヨイトマカセデ ドッコイ ドッコイ)
三崎 サーヨーオエー 沖から帰るとすれば
(アーヨイト ヨーイト)
鯛や鱈が コリヤ沖合いと出て招く ヨーイトナ
 - 3、(アーキリバ イエーホイエーホ
ヨイトマカセデ ドッコイ ドッコイ)
旦那 サーヨーオエー 大黒奥様恵比須
(アーヨイト ヨーイト)
出来たこの子が コリヤ福の神 ヨーイトナ
 - 4、(アーキリバ イエーホイエーホ
ヨイトマカセデ ドッコイ ドッコイ)
明日 サーヨーオエー よいなぎ 沖まで出たが
(アーヨイト ヨーイト)
丘の藻ばたで コリヤ万ためた ヨーイトナ